

## 18 水分管理が不良な透析患者の意識と家族の関わり方の調査

市立岡谷病院血液透析センター

○桑沢 和彦 木原 彰弘

### I. はじめに

透析患者は体液量の調整機能が損なわれている為に水分、塩分の過剰摂取により容易に血圧の上昇をきたしやすい。<sup>1)</sup> また、過剰な体重増加は透析中の血圧低下を引き起こす。安定した透析療法を行う為に体重増加は透析間1日でドライウェイト(以下DW)の3%以内、透析間2日で5%以内とされている。

当透析センターには30名の患者が外来通院している。その内透析間2日で常に5%以上の体重増加がみられる患者が10名(33%)いる。これまでもスタッフによるパンフレットを用いた指導や、栄養士による食事指導などを実施してきたが十分な結果が得られていないのが実情である。指導していく中で患者の水分管理に対する意識や家族の関わり方などが体重増加に大きく影響していると思われた。そこで、問題の原因をより詳しく分析する為にアンケートを用いて調べることにした。

### II. 研究方法

1. 調査期間: H17年5月から9月
2. 対象: 通院している透析患者とその家族
3. 研究方法: 水分管理、家族が日常生活行動に関わる項目を中心に作成したアンケートによる調査を実施し、管理が良好な患者と不良な患者の結果を比較する。そして透析の関心度と家族の関わり度をスコア化して比較する。
4. 倫理的配慮: 対象患者、家族に本研究の目的、参加の自由、守秘義務、質問用紙は無名としデータは研究目的以外に使用しないことを口頭と文書で説明し同意を得た。

### 5. 用語の定義

良好な患者: 透析間2日で体重増加が5%以内の患者

不良な患者: 透析間2日で体重増加が5%以上の患者

家族 = 支援者を含む

透析の関心度: 患者自身の食事、水分管理の実施状況及び食事の知識に関する内容を点数化したものの。

家族の関わり度: 家族が患者に接してられる時間や食事、水分管理の工夫に関わった内容を点数化したもの。

これらは点数が高いほど透析の関心、家族の関わりが高いことを示す。透析の関心度は12点満点、家族の関わり度は23点満点とした。

計算方法: 例 透析の関心度

塩分に気をつけていますか

できる限り気をつけている	2点
多少気をつけている	1点
気をつけていない	0点

### III. 研究結果

配布人数: 良好群 男性10名 女性10名

不良群 男性8名 女性2名

回収率: 全体80%

良好群回収率: 17名 85%

不良群回収率: 7名 70%

患者全体の平均透析年数: 6.3年

良好群の平均透析年数: 7.7年

不良群の平均透析年数: 3.6年

良好群の平均体重増加率: 3.7%

不良群の平均体重増加率: 5.9%

桑沢 和彦 市立岡谷病院血液透析センター 看護部

〒394-8512 岡谷市本町4-11-33 0266-23-8000

アンケートの結果を良好群と不良群と比較、検討した。まず、透析年数でみると、透析年数が5年以内で40代から50代の患者に不良群が多くみられた。

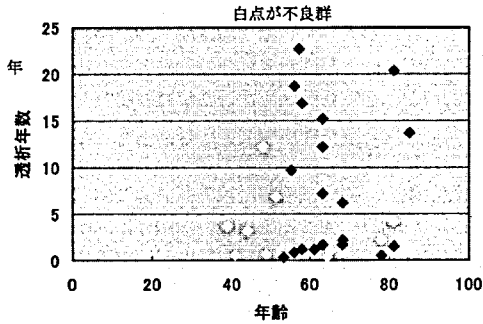


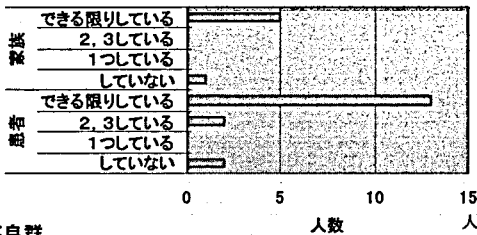
図1 年齢と透析年数

家族が、1日のうち患者本人に接していただける時間を比較すると良好群では「ほとんど一緒」と答えたのが60%、不良群では17%で、良好群のほうが家族と接している時間が多い傾向にあった。

一日に飲む水分量の測定は、良好群では59%が測っていると答え、不良群では14%であった。

体重が増えすぎないための工夫はしていますかという質問に対する結果は図2の通りであり、良好群では患者本人が「できる限りしている」と答えた人数が家族の回答より上回っていたが、不良群では家族のほうが上回っていた。

良好群



不良群

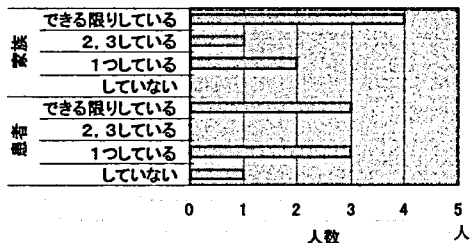


図2 体重が増えすぎないための工夫はしているか

塩分には気をつけていますかという質問では、良好群では患者本人が「できる限り気をつけている」という答えが88%に対し、不良群では43%であった。これに対して、家族では良好群が「できる限り気をつけている」と答えたのは59%で、不良群は71%と上回った。

今の体重増加は適当だと思いますかという質問で「はい」と答えたのは、患者本人は良好群64%、不良群72%であった。家族では良好群が41%であるのに対して不良群では86%と大きく差がでた。

(図3、4)

良好群

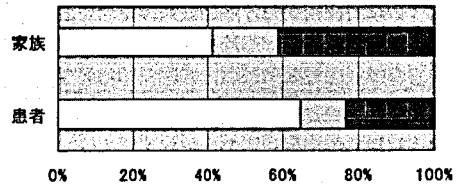


図3 今の体重増加は適当だと思いますか

不良群

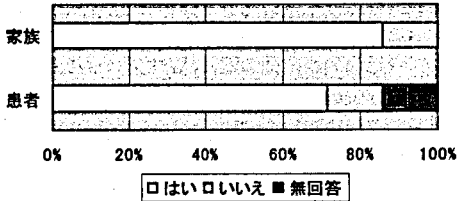


図4 今の体重増加は適当だと思いますか

各質問に点数をつけて集計した結果、良好群の「透析の関心度」は平均10.0点で不良群は8.0点と良好群が上回った。反対に「家族の関わり度」は良好群が12.6点、不良群が14.1点で不良群が上回った。

IV. 考察

慢性疾患の治療の特徴として浅野は生涯にわたる治療、症状と生活のコントロールが必要である。すなわち、生活そのものが治療になる<sup>2)</sup>と述べている。

今回、アンケート結果を分析することにより良好群と不良群を分けるいくつかの要因が考えられた。

水分管理が不良な患者は透析年数が5年以内で40歳から50歳の比較的若い年代に多く集中していた。年齢が若く体力的に過度な除水に耐えられる為、過剰な体重増加に対し危機感が薄いのではないかと考えられる。実際に「一日に飲む水分量の測定をしていますか」という質問や「体重が増えすぎないための工夫はしていますか」という質問においても不良群の患者本人はあまり水分管理を行っていないことが分かる。

ストラウスは慢性疾患を有する者の8つの課題で

痛みの軌跡<sup>3)</sup>を示している。透析を導入して間もない患者は治療により溢水及び尿毒症に伴う身体的な苦痛から解放される。この時期を軌跡に合わせて4：急性期から5：安定期に移行し始める時期とすれば、この「安定期への移行」の状態がさらに危機感を和らげ、自己管理する意欲を低下させる一因になっていると考えられる。

さらに「今の体重増加は適当だと思いますか」の質問では図3、4が示すように、不良群ではDWの認識に誤解があることが分かった。透析治療に対して誤った理解をしていた為、行動に結びつかなかったのかもしれない。

水分管理不良のもう1つの要因として、家族の関わり方が大きく影響を及ぼしていた。良好群では本人と一緒にいられる時間が長いのに対し関わり度は低く、逆に不良群では本人と一緒にいられる時間が少ないが関わり度は高い結果になった。「塩分には気をつけていますか」という質問や図2をみても不良群の場合、本人よりも家族が水分管理に配慮していることが分かる。アンケートの記述からも良好群は「本人がしっかりしているから任せている」といった内容のものがあった。不良群では本人が水分管理に消極的な分、家族の支援が多くなっているのではないかと考えられる。逆に家族の支援が過ぎて患者本人が依存してしまっているのかもしれない。しかし実際には図4が示すように家族にもDWに対する認識に誤りが在り、結果として水分管理が不良になってしまっていた。現在患者会などを利用して年に数回家族を含めた指導を行っているが、一部に指導の内容、目的が正確に伝わっていない現状が浮き彫りになった。

## V. 結論

1. 水分管理が不良な患者は透析年数が5年以内で、40歳から50歳代に多い。
2. 水分管理が不良な患者は透析の関心度が低く、家族の関わり度が高い。両者ともにDWに対して誤解している割合が高い。
3. 水分管理が不良な患者には家族の関わり方が大きく影響している。

## VI. 参考文献

1. 大橋信子 他：透析室標準看護計画 50；透析ケア、2002 冬季増刊号、メディカ出版 P56、2002.
  2. 浅野美知恵：慢性疾患ナーシング；Nursing Mook13、(株)学習研究社、p4 2002.
  3. 浅野美知恵：慢性疾患ナーシング；Nursing Mook13、(株)学習研究社、p3 2002.
- 参考文献
1. 岡美智代：透析患者のセルフケア支援；看護学雑誌；医学書院、2005.